

生と死——医学の観点から

フエリックス・ウンガー
山崎達也 訳

生命とは最高の財産であり、生きとし生けるものを厳粛にさせる、最上にしてけっして侵害されることのない価値である。生命は神の創造の一部なのであるから、他のすべての価値は生命の下に置かれなければならない。しかも創造は人間、動物、植物だけではなく、全自然を包含している。したがって人間にとって最大の義務は、神の創造を尊重し、慎重にそして常に啓発されるように取り扱うことにある。

生命という基本的な価値のなかに人間が尊厳であることの根拠があり、また人間の権利はそこに保証され

ている。この基本価値が最初に書き記されたものが、すでに十戒のなかに見られる。第一戒から第四戒までのテーマは創造者であり、両親を含めた創造について取り扱われている。第五戒から第八戒は、他者に対する態度が語られている。すなわち、「あなたは父と母を敬いなさい」「あなたは殺してはならない」「あなたは姦淫してはならない」そして「あなたは盗んではならない」である。第九戒と第十戒では、隣人の家族と財産への尊重が語られている。

第六戒において明示されている要求すなわち「あな

たは殺してはならない」は、医療行為においても、その基本になっている。というのは、生命が最高の財産にして侵害されえない基本価値であるならば、価値のない生命などありえないからである。生命の始まりと終わりにおいて医療の介入がテーマとなるとき、以上の関係は考慮するに値する問題である。

生と死は人間生命の中心の問題であり、生の始まりと死にさいして常にその効力を發揮するのが医学であるから、生と死が医学にとっても中心の問題であることは当然のことである。生と死といういわば人間生命の両端の点は、基本的には、実にあっさりした出来事なのである。死は生命を構成する中心的要素なのであり、したがって死は医学においても重要な役割を演じているわけである。

定義から言うと、死は脳の機能停止から始まる。ここから導き出された「脳死」という考えはたしかに人々に繰り返し不快の思いをもたらしてきた。この考えは一九五四年、モレー (Mollaret) とギュロン (Goullon) によって作り出された名称《昏睡を超えた状態》

(Coma dépassé)、すなわち大脳および脳幹の不可逆的機能停止に由来している。[Coma dépassé] という言葉はドイツ語圏においては [Hirnod] (脳死) と訳され、英語圏においては [Brain death] (脳死) に相当する。すでにビシャ (Bischa) は、人の死が脳から始まり、それから身体他の部分に行き渡ることを認めていた。この死へのプロセスは数時間から数日間にまで及び、それはショーペンハウアーの記述すなわち「人間は死ぬのではなく、生きることを止めるのである」(Hamperlの引用) に一致している。しかしこの観察結果は、医療技術が極めて乏しく、しかも人々の大部分が自宅で死を迎えていた時代のものであることは言うまでもない。それに対して、現代においては生命の始まりと終わりほとんどの場合、病院内の出来事になっている。しかし病院では死は邪魔者扱いされることはあっても、最高の安らぎとしてイメージされることはやはりないのである。

現代医学はそのあらゆる手段を用いて生を引き伸ばすことには成功したけれども、しかしそれは死のプロ

セスをいたずらに伸ばすことになるかもしれないし、それどころか、耐え難い苦痛を伴うものになってしまいかもしれないのである。しかしながら人間性という掟は、医学の勝手な振る舞いに限界を設けることを教え、そして安らぎのうちに患者に死を迎えさせることを命じる。

家族のいる自宅から、病院というどちらかと言うと即物的な環境への死の移動は、脳死を人の最終的な死として定義することに対してなぜあれほど多くの人が首をかしたのかという理由の一つなのかもしれない。というのは、現代医学の技術を援用することによって、脳死の人の循環機能を幾重にもわたって維持することができるようになったからである。つまり、このことによって移植を目的とした臓器を生きたまま保存することが可能になるからである。この点で言うと、第三者にはその患者が死んでいるとはまったく思えないのはもっともなことであるし、だからその人の生きている身体が《食い尽くされる》という印象を受けるのである。このため二〇〇六年には、脳死の人からの臓器

移植に関して、反対する態度を取る人たちが増加したことが明らかになった。

こうした懸念がますます強まることによって、《脳死》という名称の使用を止めて、差しさわりのない他の名称に換えるべきだという考えが急きよ登場してきている。同時に、「昏睡を超えた状態」(Coma egressum)という表現、すなわち医療行為にとつてきわめて馴染みの深い名称も問題となっている。この表現は最終的な状態、すなわち人間の身体的な死を引き起こし、覚めることのない、生を超えた状態を意味しているからである。この状態はさらに、血液循環の不安定性や尿崩症(Diabetes insipidus)や低体温症に見られる脳の不可逆的停止に至る。「昏睡を超えた状態」の原因としてあげられるのは、とりわけ大量出血や重傷害、広範囲にわたる脳腫瘍、脳組織内の酸素欠乏、脳腫脹そして中毒である。このような破損に伴う脳浮腫によって、脳血流が止まり、脳組織がやがて壊死してしまうのである。

《Coma egressum》と名づけられた脳の機能停止は脳死

といわれるものに一致する。また一致するものと認められうるし、しかもそのさい脳死の場合と同様に重要なことは、脳障害の原因を突きとめること、脳機能の可逆的な停止を除外すること、さらには脳幹反射が見られないこと、脳波による電気信号がすでにみられないこと、そして脳血流がすでないことを確かめることである。観察時間に関して言えば、本来ならば、成人の場合は十二時間、乳児の場合は七十二時間を要すべきだと思われる。

《Coma egressum》だと判定することは、以下のような決定的な意味を持っている：

- ・集中治療にとつては、最大限の治療を終わらせ、死の手續きを始めること。
- ・家族にとつては、これが最後の別れになること。
- ・臓器移植にとつては、《Coma egressum》の判定は不可欠であり、しかも今日の方法と知識をもつての判定に関してではもはや異議をはさむ余地がないこと。したがって、判定基準と移植の決定は間違いないと見なされるのである。

ところで、移植医療の傑出した成果によってもたらされたことは、生命機能停止としての「死亡 (Tot)」と生の終わりとしての「死 (Sterben)」の違いの根本的分析が忘れ去られたことである。しかもこの成果は、人間部品交換所としてのまだ《温かい死体》を利用するということに関して、多くの人々が抱く不快感を相当な程度もたらしている。というのは、このときドナーが臓器バンクになりさがっていると印象づけられるからである。

しかしながら、《Coma egressum》において死にゆく人から臓器を摘出することは、それが連帯行為あるいはキリスト教的な援助行為だと理解されるならば、別の意味を持つてくる。というのは、最終的にこの世から去り行くものは、臓器移植という救命措置がなくては死ぬ以外にはない人にとつて、延命に不可欠な臓器を提供するからである。こうしたパラダイム変換が意味していることは、言うまでもなく「死亡 (Tot)」と「死 (Sterben)」のプロセスに対して私たちが一段と集中的に取り組んでいくべきであるということである。ネスト

ロイ (Nash) によれば、医学部にあるのは死ではなく、不治の病だけである。現代の世界にあっても、死は降伏とか空しさ (Ertollosigkeit) と見なされることがよくある。だからこそ、死を生命が持っている本来の要素のひとつとして、ふたたび認めるべき時が来たのではないかと考える。

人工的な死—新しい倫理？

生命とは侵すべからざるものであるとする伝統的倫理は、二千年以上にもわたって、人間の思考とその決定を規定してきた。しかしいまや、この原則はさまざまな方面から疑問視され、人間生命の不可侵性は多くの国でもはや最高の善だとは考えられてはいないのである。このように要請されているパラダイム変換は、ネオ・リベラリズムや社会ダーウィニズム的傾向が強まってきたおかげで、ますます賛同を得ており、また医療給付の支払不能ということをたえず耳にしている市民によって実感されている。

このために《新しい倫理》を求める声が、ますます

高くなりつつあるが、その倫理とは、人間生命は行為によってのみ意義と価値とを獲得する、すなわち功利的基礎の上に成り立つ倫理である。意義をもたらず行為の前提は、自己意識、自己制御、記憶力、コミュニケーション能力といった性質および未来と時間の知覚である。このようにいわば品質を決める特徴によって始めて、人間生命は尊厳、価値そして権利を獲得することになる。その結果として導かれることは、年齢、健康状態、能力に左右されることなく、また肌の色や性に関わりなく、各個人に人格と尊厳を保障している人権の普遍性が疑わしくなるということである。

現代社会は社会ダーウィニズムや功利主義的考えによってますます支配されつつある。医学の進歩によってもたらされた苦痛の除去は、世界のあちこちで、苦悩からの完全なる解放を要請するにいたっている。この結果として、われわれの世代もまた安楽死の時代へと歩みつつあるように思われる。

安楽死への要求がますます声高に叫ばれる一方で、法律家、哲学者、社会学者たちは、生命には価値があ

るのかあるいは無価値なのかをふたたび規定できると信じている。また、積極的安楽死を支持する人たちは「安楽死によって、死から恐怖が取り除かれる」と信じている。しかし、それとは反対に、私は「積極的安楽死は、生に新たな恐怖を付け加えるだろう」と強く確信している次第である。

(フェリックス・ウンガー)

ヨーロッパ科学芸術アカデミー会長

(訳・やまさき たつや／東洋哲学研究所研究員)